

## 日本統治時代の台湾の同化政策における「説話」の機能 ——1913(大正2)年の『公学校用国民読本』に着目して——

劉 晏 君

### 0. はじめに

#### (1) 研究の目的

本研究は、1901(明治34)年刊行の『台湾教科用書国民読本』(以下、台湾第一期と略す<sup>①</sup>)から1913(大正2)年刊行の『公学校用国民読本』(以下、台湾第二期と略す)までの、「説話」教材の推移に着目して、「説話」の同化政策における役割を究明することを目的とする。

陳培豊(2001)は、日本統治時代に施された「同化」の実質が多義的であると指摘し、「民族(文化)への同化」、「文明への同化」を枠組みとして台湾統治を解明した<sup>②</sup>。陳は、「民族への同化」および「文明への同化」を、それぞれ以下のように定義している。

「民族への同化」:

日本人らしさをもたらしするために必要とされる日本独自の価値観や伝統、特に国体精神への「同化」である。

「文明への同化」:

近代化生活に相應する必須の知識、つまり西洋文明を中心に資本主義の発達によって普遍的な価値とされる合理主義や啓蒙主義に関連する内容への「同化」である。<sup>③</sup>

そして、陳は、「同化」の基本概念を台湾における国語教育を中心に検討し、台湾第一期、第二期に反映されている二つの同化の傾向を検証した<sup>④</sup>。すなわち、蔡錦堂(1993)における教科書の題材分析の結果に基づいて、「民族への同化」の反映を「皇室」、「国家」に関する教材から、「文明への同化」の反映を「科学」や、「実業」に関する教材から読み取ろうとしたのである。その検討を通して、「国語科」における「皇室」、「国家」<sup>⑤</sup>に関する教材および「科学」や「実業」に関する教材が同化政策において果たした役割が明瞭になった。

台湾第一期が使用されていた時期の「国語科」は、「公学校規則」1898(明治31年)によれば次のように規定されていた。

国語ハ音韻ノ性質言語ノ種類典則応用及会話ノ十種並地理歴史理科ニ関スル講説ヲ授ク<sup>⑥</sup>

つまり、同時代の内地における「国語科」と同様に、台湾の「国語科」には、地理、歴史、理科などの教科内容も含まれており、総合的な教科の性質を持っているのである。蔡(1993)はそれらの教科内容を「皇室」「国家」「科学」「実業」「文学」「歴史」「社会(一)」「社会(二)」「生活(一)」「生活(二)」などに分けて分析したのである。このような事情を踏まえると、上記の10分類のうちの「皇室」「国家」「科学」「実業」にのみ着目した陳の考察は、他教科の内容も併せ持

つ「国語科」の一部分にとどまることになる。「国語科」の、同化政策における役割を考察する場合には総合的な教科の性質をもつ「国語科」における他の教材にも着目する必要があると思われる。そこで本研究では、「国語」固有の教材と思われる、「説話」にとくに着目し分析を試みることによって、所期のねらいを達することにする。

## (2) 研究の方法 説話への着目

甲斐雄一郎（2007）<sup>9)</sup>は、小学校令施行規則（1900）、台湾公学校令（1898・1904）などにおける国語科の教材規定を援用して、「地理的教材」、「歴史的教材」、「理科的教材」などの枠組みを用いた教材の分析及び対比を行うことによって、日本における検定教科書が台湾第一期、そして国定第一期にどのように継承されたかを明らかにするとともに、台湾第一期と国定第一期との関連を示唆した。本研究では、このような台湾第一期と国定第一期との関連をも踏まえて考察を行う。そのほか、他教科内容の教材との関連を踏まえながら、「説話」の推移をたどっていくことによって、同化政策における「説話」の機能を究明する。

台湾における教科書と日本における国定教科書刊行の推移は以下の通りである。

〈表1〉

	台 湾	日 本
1901(明治34)年	台湾第一期	
1904(明治37)年		国定第一期
1910(明治43)年		国定第二期
1913(大正2)年	台湾第二期	

「説話」に着目したのは、国定第二期において「説話」に関する教材選択の方針の転換が見られるからである。国定第一期の編纂趣意書における教材選択の規定に、「修身」、「理科」、「地理」、「歴史」、「実業」、「国民教科」の内容に関する規定が書かれているが、「説話」に関しては特に書かれていなかった。しかし、国定第二期の編纂趣意書には、「説話」について、「人口ニ膾炙シテ趣味アル説話ヲ加入シタリ」と規定している<sup>10)</sup>。つまり、内地では国定第二期において「説話」が重視されるようになった。このような方針は、国定第二期が発行された後に編纂された、台湾第二期の「説話」の教材選択に何らかの影響をあたえたと考えられる。

陳が用いた蔡の分析は、唐澤富太郎<sup>11)</sup>の分類に依拠している。しかし、唐澤の分類からでは、教科固有の内容を明確にすることが出来ない。他教科の内容との関連も踏まえて検討を行うためには、教科別に分類しなければならない。そこで本研究における分類は、甲斐（2007）と同じく教科規定に依拠することにする。

内地の国語科に関しては、小学校令施行規則第3条に「材料ハ修身、歴史、地理、理科、其ノ他生活ニ必須ナル事項ニ取り趣味ニ富ムモノタルヘシ」と規定されている<sup>12)</sup>。そして、台湾の国語科の教授内容に関しては、前項で述べたとおり、地理、歴史、理科の内容も含むのである。このように、これらの教科規定に依拠し分類を行うことにより、教科固有の内容を明確にする。教

材の分類を、教科規定を参考に「修身」、「地理」、「歴史」、「理科」、「実業」、「国民・公民」、「その他」の7項設ける。

教材を上記の手法で分類するほか、以下の二つの規定に依拠し、分析対象である「説話」を抽出する。一つ目は、国定第一期の編纂趣意書における教材選択に関する規定である。すでに述べたように国定第一期の編纂趣意書には、「説話」に関して特に規定が書かれていないが、「修身」に関して次のように規定している。

修身ニ関スル教材ハ抽象的訓戒ニ属スルモノヲ避ケ主トシテ道德的意義ノ存スル話譚ヲ選択セリ<sup>(41)</sup>

このような、「道德的意義ノ存スル話譚」を、「説話」として取り上げる。次に、国定第二期の編纂趣意書における、「説話」に関する以下の規定を用いる。

多クノ国民的童話・伝説ヲ加ヘタルコトモ亦新読本ノ一特色トスル所ナリ。第一巻ヨリ桃太郎・猿蟹合戦・牛若丸弁慶・瘤取、餅ノ的、天神様・花咲爺・野見宿禰・義家・浦島太郎・仁田四郎。因幡ノ白兔、那須与一・小子部螺羸、鶴越の坂落し、天岩戸・釜盗人等、人口ニ膾炙シテ趣味アル説話ヲ加入シタリ。<sup>(42)</sup>

上記の規定に挙げられている教材例のほか、同じ類に属する教材を取り上げる。以上の規定に依拠して、分析対象に該当する「説話」を抽出した後、「説話教材」（以下A類）、「説話的教材」（以下B類）に分ける。さらに、A類を「神話」、「国民的童話」、「童話」の3項に分ける。まず、神などに関する「説話」を、「神話」に分類する。次に、前記の教材選択の規定に挙げられている童話の「桃太郎」「猿蟹合戦」「瘤取」「花咲爺」「浦島太郎」を、「国民的童話」に分類する。最後に、「国民的童話」以外の童話を、「童話」に分類する。そして、B類もさらに「説話的修身」、「説話的歴史」、「説話的内容教科」の3項目に分ける。まず、修身に関する「説話」を「説話的修身」に分類する。次に、歴史に関する「説話」は、「説話的歴史」に分類する。最後に、地理、理科、実業、国民教科に関する「説話」は、「説話的内容教科」に分類する。

以上の方法で選出したA類、B類の教材に含まれたメッセージを浮き彫りにするため、それらを「徳目」ごとに分類する。分類は、1904(明治37)年に発行された、国定修身読本の編纂趣意書<sup>(43)</sup>に規定されている「徳目」に依拠する。編纂趣意書における「徳目」は、「学校」、「家庭」、「社会」、「個人」、「国民<sup>(44)</sup>」に関する心得などがある。これらのうち、「学校」、「家庭」に関する心得は、「社会」、「個人」、「国民」の心得と重複する部分があり、後者三つに取り入れることも可能である。そのため、本研究では、「社会」、「個人」、「国民」に関する心得の三つの項を用いる。〈表2〉は「社会」、「個人」、「国民」に関する心得の「徳目」の細目一覧である。

そして、以上の修身の徳目を含まない教材を、「その他」に分類する。1課の中に、テーマが複数以上ある場合は、個別に数え1テーマを1教材にする。例えば、台湾第一期の「寓話三題」(10巻5課)のように、1課に「矛と盾」、「狐と鳥」、「相もち」の三つの話が入っている場合、3教材と数える。

〈表 2 「社会」,「個人」,「国民」に関する心得の「徳目」〉

社会	友だち 近所の人 度量を大きくせよ けんかをするな うそをいふな 人の妨をするな 自分の物と人の物 拾ひ物 預り物 としより 人の名誉を重んぜよ 恩を忘れるな 正直 約束 人のあやまち あやまち 礼儀 わるいすすめ 規則 人をそねむな 慈善 博愛 共益 共同
個人	からだ 身体についての心得 健康 たべもの 清潔 学問 知識をみがけ 迷信を避けよ 元気 よくあれ 勇気 忍耐 志を強くせよ 勤勉 過をかくすな 行儀 ことばづかい きまりよくせよ 自分のこと 自営 ものごとにあわてるな 難儀をこらへよ 心の咎めることをするな 自慢するな 物を粗末にあつかふな 儉約 時を重んぜよ 人は万物の長 男の務と女の務 生き物
国民	天皇陛下 皇后陛下 大日本帝国 愛国 忠君 忠義 勇気 兵役 納税 教育 議員選挙 法令を重んぜよ 日の丸の旗

## 1. 台湾第一期と国定第一期における説話的教材選択の特徴

この節では、台湾第一期と国定第一期を比べることによって、台湾第一期の特徴を把握する。比較は、「説話」の各教材種類の教材数や、「徳目」の重点の違いを観点として用いる。〈表 3〉(本稿末の資料を参照)が、上記の分類枠組みによる台湾第一期、第二期および国定第一期、第二期の分類結果である。〈表 3-1〉, 〈表 3-2〉は、〈表 3〉の台湾第一期および1904(明治37)年に発行された国定第一期の分類結果の数を並べたものである。

〈表 3-1 台湾第一期「説話」の分類〉

台湾第一期		社会	個人	国民	その他	合計
A 類	神話	0	0	0	0	0
	国民的 童話	0	5	0	0	5
	童話	4	11	0	8	23
B 類	修身	3	5	0	0	8
	歴史	1	7	2	0	10
	内容 教科	0	2	0	0	2
合 計		8	30	2	8	48

〈表 3-2 国定第一期「説話」の分類〉

国定第一期		社会	個人	国民	その他	合計
A 類	神話	0	0	0	2	2
	国民的 童話	0	0	0	1	1
	童話	5	10	0	2	17
B 類	修身	2	1	0	0	3
	歴史	3	8	7	0	18
	内容 教科	3	0	2	4	9
合 計		13	19	9	9	50

〈表 3-1〉と〈表 3-2〉を比較してみると以下の 2 点の特徴が見られる。

①教材種類の数の違い：台湾第一期と国定第一期を比べてみると、以下の二点の違いが見られる。一つは、台湾第一期では説話教材において「童話」が一番大きい比重を占めているのに対し、国定第一期では、「童話」とともに「説話的歴史」が大きい比重を示している。二つ目は、台湾第一期における「童話」が、国定第一期より 6 教材多いが、「説話的歴史」が国定第一期より 5 教材少ない点である。このような相違が意味することは、「童話」と「説話的歴史」に含まれている「徳目」の内訳を見てみるとより明白になる。まず、「童話」についてみてみると、「その他」に分類されている教材に数の差が見られる。台湾第一期の「その他」に分類されている教材は、8 教材

あり、国定第一期より6教材多い。次に「説話的歴史」における差異は、「国民」の「徳目」を含む教材数に表れている。台湾第一期の「国民」の「徳目」を含む教材が2教材しかないのに対し、国定第一期は7教材ある。

すなわち、台湾第一期においては、「その他」の分類に入る「童話」が重視されているが、「国民」の「徳目」を含む「説話的歴史」が重視されていないことが分かる。「その他」の分類に入る「童話」の一例である「寓話三題」（10巻5課）には、「矛と盾」、「狐と鳥」、「相もち」の三つの話が含まれている。「寓話」とは、教訓的なメッセージを含むものである。しかし、「寓話三題」には、特に明白な「徳目」が含まれているとはいいいく。このような、「その他」の分類に入る、特に明白な「徳目」を持たない「童話」を重視する傾向は、台湾第一期の特徴ともいえよう。②「個人」に関する「徳目」の重点の違い：台湾第一期および国定第一期には、前項のような相違点が見られる。その他、台湾第一期および国定第一期における、一番大きな比重を占める「個人」に関する「徳目」についても、以下のような違いが見られる。登場人物や話の趣旨から見ると、台湾第一期においては、〈表2〉の「個人に関する心得」の「徳目」のうち、「勤勉」、「儉約」など商売や仕事に関する項目が重視されている。一方、国定第一期においては、「学問」、「勇気」など、個人の品格を磨くことに関する項目が重視されていることがわかる。このような違いは、以下の教材の比較から観察することができる。

台湾第一期における、台湾固有の教材は以下のとおりである。「個人」の「徳目」を含む「童話」に、「馬と豚の話」（8巻6課）、「二人の農夫」（8巻12課）、「往ケト来イ」（10巻14課）などがある。これらの内容は、仕事に対し勤勉である人は報われる話である。「説話的歴史」に「個人」の「徳目」を含む教材には、「多助のしんぼお」（8巻3課）、「井上でん」（1巻17課）、「天下の糸平」（10巻17課）などがある。各課に登場する人物は、勤勉であるため、商売などに成功した人物である。

一方、国定第一期における、国定固有の「個人」に関する教材は以下の通りである。「童話」においては、「マツノハナシー、二」（4巻12,13課）がある。この内容は、〈表2〉における「個人に関する心得」の、自己の品格を磨くことを奨励する内容である。「説話的歴史」においては、高等小学校（以下、高等と略す）での採用の「ジョージ、スチブソンー、二」（高等1巻10,11課）、「源為朝」（高等2巻15課）、「一谷の戦一、二」（高等2巻,16,17）、「鳥居強右衛門」（高等3巻8課）、「蒸気機関車の発明」（高等4巻14課）がある。各課に登場する歴史人物は、勇気や強い志を持っている人、および学問を究める人などが多い。

## 2. 両者の推移

### （1）国定第二期の量的な変化およびテーマの推移

1908(明治41)年に義務教育年限が延長されたことをうけ、国定第二期が1910(明治43)年に発行された。秋田喜三郎(1943)は、国定第一期が「理科・歴史・実業・国民科」に属する教材は、四

箇年の義務教育期間に提出することはかなり困難なことで、勢上学年の教材が文学的趣味より遠ざかったのは止むを得なかった」<sup>(15)</sup>と述べている。その他、編纂趣意書では、国定第二期において、「文学的趣味」が重視されなかったことについて下記のように述べられている。

特殊国民的材料ノ加入、文学的趣味ノ添加等ハ編纂者ガ従来ノ読本ノ欠点ヲ補ハント欲シタル努力ヲ示スモノタリ<sup>(16)</sup>

上記の規定から、国定第二期は、国定第一期の「欠点」を補おうとしている傾向が示されている。これは、義務教育が六年に延長され、日本歴史、地理、理科の教科が小学校五、六年に必修科目として位置づけられ、国語科は他教科の内容を包括する必要が少なくなったためである。〈表3-3〉は、国定第二期の「説話」の数を並べ分類したものである。

〈表3-3 国定第二期における「説話」の分類〉<sup>(17)</sup>

国定第二期		社会	個人	国民	その他	合計
A 類	神話	0	0	3	2	5
	国民的 童話	0	4	0	2	6
	童話	6	11	0	5	22
B 類	修身	2	2	0	0	4
	歴史	7	18	11	0	36
	内容 教科	2	0	2	3	7
合 計		17	35	16	12	80

〈表3-4 国定第一期から第二期までの増減〉

国定第一期		社会	個人	国民	その他	合計
A 類	神話	0	0	+ 3	2	+ 3
	国民的 童話	0	+ 4	0	+ 1	+ 5
	童話	+ 1	+ 1	0	+ 3	+ 5
B 類	修身	0	+ 1	0	0	+ 1
	歴史	+ 4	+10	+ 4	0	+18
	内容 教科	- 1	0	0	- 1	- 2
合 計		+ 4	+16	+ 7	+ 3	+30

国定第二期の「説話」教材数は国定第一期よりも30教材増えている。これは、前述の国定第一期の「欠点」を補おうとしている傾向の反映とも言える。〈表3-3〉および〈表3-4〉の国定第一期から第二期までの変動と増減をみると、以下の3点がまとめられる。

①重視されている教材の種類：国定第二期において増加した教材には、「神話」、「国民的童話」、「童話」、「説話的歴史」がある。これらの教材が増やされたのは、「特殊国民的材料」「文学的趣味」の内容を含んだ教材を増やす教材選択の基準を満たしているためであると認められる。特に、「説話的歴史」は18教材増加した。

②「説話的歴史」に含まれた「徳目」の重点：国定第二期において重視されている「説話的歴史」のうち、さらに重視されているのは、「個人」の「徳目」を含む「説話的歴史」である。このような特徴は、以下のことから見られる。〈表3-4〉から、増加した「説話的歴史」の18教材のうち、「個人」に関する教材が10教材占めている。このことから、「説話的歴史」の「個人」に関する「徳目」を含む教材は、「社会」、「国民」に関する「徳目」を含む教材の増加数を上回っていることがわかる。特に、「個人」に関する「徳目」のうち、「物をそまつにあつかうな」、「男の務めと女の務め」、「忍耐」などの項目を含む教材が増加した。

③「説話」の増加の方針：以上から、国定第二期において最も重用されている「説話」は、「個人」の「徳目」を含む「説話的歴史」であるという結果が得られる。このような傾向から、国定第二

期における方針が見えてくる。つまり、「文学的趣味」のある「説話」は増やす一方で、特に「徳目」を持たない教材よりも、「徳目」を持つ「説話的歴史」に重点を置いている方針が見られる。すなわち、「説話」は、児童の興味を喚起した上、修身的な「徳目」を付与する内容や、「国民的材料」がより重視されているのが、国定第二期の考え方であるとみなすことができる。

## (2) 台湾第二期における量的な変化およびテーマの推移

前述のとおり、国定第二期では、国定第一期より「説話」の総数が大幅に増加している。しかし、1913(大正2)年に発行された台湾第二期では、逆に減少しているのである。この選択に関して、編纂趣意書では下記の通りに述べられている。

就中国民的精神ノ涵養ト、日常生活ニ適切ナラシムルコトトノ二点ハ、本書ノ最モ意ヲ

致シ<sup>ス</sup>所ニシテ、趣味ヲ豊富ナラシムルノ事、亦之ニ重キヲ置ケル所ナリトス

上記の規定は、台湾第一期のような「児童の興味を喚起する」教材が重視されなくなり、「国民的精神」を涵養する教材に重点が置かれるようになったことを示すものである。

〈表3-5〉は、台湾第二期の「説話」の分類表である。台湾第一期と比べ、台湾第二期の「説話」の数は急激に減少してはいないが、〈表3-5〉から「説話」の類型に推移が見られる。

〈表3-5 台湾第二期の「説話」の分類〉

台湾第二期		社会	個人	国民	その他	合計
A類	神話	0	0	0	0	0
	国民的 童話	0	2	0	2	4
	童話	3	11	0	2	16
B類	修身	1	1	0	0	2
	歴史	2	2	6	0	10
	内容 教科	0	4	1	0	5
合 計		6	20	7	4	37

〈表3-6 台湾第一期から第二期までの増減〉

台湾第一期		社会	個人	国民	その他	合計
A類	神話	0	0	0	0	0
	国民的 童話	0	-3	0	+2	-1
	童話	-1	0	0	-6	-7
B類	修身	-2	-4	0	0	-6
	歴史	+1	-5	+4	0	0
	内容 教科	0	+2	+1	0	+3
合 計		-2	-10	+5	-4	-11

〈表3-5〉と〈表3-1〉を比較すると、台湾第一期から第二期における移行の変化が見られる。

①教材選択の基準に達している教材種類：台湾第二期において「説話」は、減らされる傾向が見られるが、大きな減少が見られない「説話」の教材種類もある。それは、「国民的童話」、「説話的歴史」および「説話的内容教科」である。これらの教材は、台湾第二期の教材選択の基準である、「国民的精神ノ涵養」と「日常生活ニ適切」に達したものと認めることができる。

②「徳目」の重点移動：前項の「説話的歴史」を採用する傾向は、国定第二期の傾向と同じである。しかし、「説話的歴史」に含まれる「徳目」の重点については、違いが見られる。台湾第二期において、「説話的歴史」に「個人」の「徳目」が含まれる教材は、7教材から5教材減り、2教材になった。そして、「国民」の「徳目」が含まれる教材は、2教材から4教材増え、6教材になった。つまり、台湾第二期において、「説話的歴史」における「徳目」の重点は、「個人」から

「国民」へ移動したのである。このような「徳目」の重点の移動は、「童話」にも見られる。台湾第二期において、「社会」、「個人」の「徳目」が含まれた「童話」に大きな変動は見られない。しかし、「その他」に分類されている「童話」は、8教材から6教材減少して、2教材になった。変動した教材は、以下の通りである。

台湾第二期で増加した「国民」の「徳目」を含む「説話的歴史」に、「能久親王」（8巻2課）、「楠公父子一、二」（10巻2、3課）、「乃木將軍」（10巻23課）、「日本武尊」（11巻3課）がある。

台湾第一期における「その他」の分類に入る「童話」には、「ゲジョトイヌ」（4巻6課）、「寓話三題 1.矛と盾」（10巻5課）、「寓話三題 2.狐と鳥」（10巻5課）、「寓話三題 3.相もち」（10巻5課）、「寓話三題 1.大穴の坊様」（11巻8課）、「寓話三題 2.鹿わな」（11巻8課）、「智恵の話三題 2.象の目方」（12巻9課）、「智恵の話三題 3.川村端軒」（12巻9課）の8教材がある。台湾第二期では、「カラスノチエ」（4巻10課）、「虎と赤ん坊」（9巻18課）がある。

上記をまとめると、台湾第二期は、「説話」の重点が台湾第一期の「その他」の分類に入る「童話」が不用とされ、「国民」の分類に入る「説話的歴史」に編纂方針の重点が移った動きが認められる。

### 3.「実学性教材」を重視する傾向

陳は、1913(大正2)年まで同化政策に携わった主な人物を四人挙げ、それぞれ同化に対する構想の異同を考察した。一人目は、国語を中心とした同化政策の基盤を作り上げた伊沢修二である。陳によると、初代台湾総督府学務部長を務めた伊沢は、「文明への同化」を通し「民族への同化」に繋げようとした<sup>(18)</sup>。1898(明治31)年に伊沢が非職となった後、同化政策の統治方針に影響を及ぼしたのは、総督府民政長官に就任した後藤新平と、1903(明治36)年後藤体制の下で学務課長を務めた持地六三郎である。陳は、彼らの同化方針を「民族への同化」ではなく「文明への同化」に重点を置いていると指摘した<sup>(19)</sup>。そして、大正期に入り、同化政策の方針が、「文明への同化」から「民族への同化」へと転換した時期にかかわる重要な人物として、陳は、1911(明治44)年に学務課長を務めた隈本繁吉を挙げた<sup>(20)</sup>。

台湾第一期について、陳の考察によると、「実業的教材」も含めた近代生活や文明に関連する「実学性」の高い教材が68課あり、全教材の37.2%占めている。このような教材が、「皇室」、「国家」の教材より四倍も高いことから、その内容の中心が「文明への同化」にあったと検証した<sup>(21)</sup>。

台湾第二期について陳は、隈本の「文明への同化」における理念が、後藤の「従順、誠実、勤労」の労働者養成に関する理念とはほぼ一致していると述べている。一方、「民族への同化」に関して、次のような二つの特徴を挙げている。一つは、修身科が正式に設けられたことによって、「国語科」が担う徳育教育の役割が減少したはずであるにもかかわらず、「皇室」、「国家」関連の課が9課増えていること。その9課とは、「水兵の母」（10巻14課）、「楠公父子一、二」（10巻2、3課）、「芭蕉トミカン」（6巻12課）、「数へ歌」（8巻9課）、「師の恩」（8巻22課）、「盲啞学校」（9巻



15課),「卒業を知らずる手紙」(12巻24課),「生蕃」(9巻22課),「赤十字社」(10巻13課)である。もう一つは,台湾第二期に天皇,軍人,官僚,実業家などの日本人が24人登場し,「忠君愛国」,「奉公」の「日本の精神」を含む人物が多く登場していることである。そして,陳はこの二つの特徴が,台湾第二期に見る「民族への同化」を重視し始めている傾向であると述べている。ここで陳は,「文明への同化」の比重が縮小したのが,「文明への同化」を軽視した結果ではなく,「民族への同化」の比重の増大に伴って,相対的に小さくならざるを得なかったと解釈している<sup>(22)</sup>。

陳の考察から,台湾国語読本の編纂事情について以下の2点をまとめることができる。一つは,台湾第一期では,「民族への同化」よりも,「文明への同化」に重点を置かれている時期に編集されたことである。そして二つ目は,台湾第二期が,「文明への同化」に重点を置く方針を保ちつつ,「民族への同化」も重視し始めた転換期において発行されたことである。

次に,甲斐の枠組みを参考に,台湾第一期,第二期および国定第一期,第二期の教材を分類した。〈表4〉がその分類結果である。

〈表4 台湾第一期,第二期および国定第一期,第二期における各教材の数〉

台湾第一期	地理	歴史	理科	実業	国民(公民)	家政	計
	22	18	33	18	12	8	183
	説話	生活	自然	修身	書簡	雑	
	28	21	11	9	3	0	
台湾第二期	地理	歴史	理科	実業	国民(公民)	家政	計
	23	20	28	21	29	7	220
	説話	生活	自然	修身	書簡	雑	
	24	21	12	14	17	4	

陳の考察と,本研究の分析と照らし合わせると以下のようなことがわかる。一つ目は,「文明への同化」,そして「実学性」を重視した傾向が,本研究の分析と一致していることである。それは,前述で明らかにしたように,台湾第一期では,統治者側が養成しようとしていた,「実用的な労働者」<sup>(23)</sup>が書かれている教材が多いことからみることができる。その上,〈表4〉の分類結果からも,「実学性」を持った教材である,「地理」,「理科」,「実業」の教材が,全教材の大きな比重を占めていて,「実学性」が重視されていることがわかる。次に,台湾第二期について,〈表3〉の各教材が占める比重を見ると,「実学性」を持つ教材は,多少変動が見られるものの,依然として全教材の中で一番大きい比重を示している。このような結果は,陳の考察の「実学性」の教材が重視されている結果を追認することになる。

#### 4. 「説話」の位置づけ

##### (1) 「説話」に付与された役割

陳は、台湾第二期において「民族への同化」を重視し始めた根拠について、前節で述べた「国語科」が担う徳育教育の役割が縮小したにもかかわらず、「皇室」、「国家」の教材が増加したと述べている。そして、「文明への同化」の比重が小さくなったのは、「民族への同化」に偏重した影響のためであると述べている<sup>(24)</sup>。陳の指摘する、上記に点の台湾第二期においての変化について、本研究では以下の陳と異なった結果が得られた。

陳は、修身の教材を「皇室」、「国家」関連の教材であると限定している。これは、陳が述べている、台湾第一期が「ある程度修身教科書の代役を果たしていた。従って、当然、日本文化、特に皇室、国家関連の課が数多く含まれていたと予測される<sup>(25)</sup>」という点から読み取ることができる。一方、甲斐の分類方法において「修身の教材」は、「社会」および「個人」の「徳目」に関する内容の教材なども含む修身科で取り扱う教材である。陳の定義する「徳育」の「修身の教材」は、修身科の教材というよりも、「国民的教材」および「歴史的教材」の分類に近いものである。本研究の分析では、台湾第一期から台湾第二期において、「修身の教材」が増加した傾向が見られる。以上の分析からは、陳が指摘する、台湾第二期では修身科が正式に設けられたことによって、国語科が担う「徳育教育」の役割が減少した傾向が認められない。

すでに述べたように、「国語科」は、地理、歴史、理科に関する内容も担っている。そのため、教材内容の構成を分析するとき他教科、他教材との関連も考慮に入れなければならない。国定第二期と同様に1912(明治45)年の公学校令改正で理科が一つの教科として独立したため、国語科の教材構成にも影響を与えたと考えられる。これは、台湾第二期における教材数が全体的に増加したにもかかわらず、理科の教材数が33教材から28教材に減った点から見ることができる。その上、理科以外にも1904(明治37)年に新たに手工、農業、商業が随意科目として設立された。よって、陳が指摘した国語科における、理科などの「実学性」を持つ教材が減り、「文明への同化」の比重が縮小したのは、必ずしも「民族への同化」に重点が移ったばかりの結果ではない。「文明への同化」が、国語科から理科、手工、農業、商業科へ移転した可能性も考えられる。

上記の分析によると、陳が挙げた理由から、台湾第二期が「文明への同化」から「民族への同化」に重点が移動したことについて説明することができない。そのため、陳が指摘する「民族への同化」を重視し始めた方針を検証するには、別の観点を用いる必要がある。「民族への同化」を重視する方針をとり、「民族への同化」を果たす役割は、「説話」に委託されたと考えられる。

1913(大正2)年に発布された新たな公学校施行規則を旧公学校施行規則(1898)と比べてみると、授業時数が増え、理科が一つの教科となっている<sup>(26)</sup>。その他、修身読本が台湾第二期と同時に発行された。このような状況であれば、台湾第二期は国定第二期と同様に、理科、修身科の内容を担う必要がなくなり、国語科固有の教材である文学的趣味を担う「説話」を増やすことができるようになったはずであった。ところが、〈表4〉の台湾第二期各教材の比重を見てみると、

「説話」は増えるどころか減少している。その上、減少した「説話」の類型の大半が、単に「説話」の文学的趣味を楽しむためのような「その他」の「童話」である点がみられる。そして、引き続き採用されたのは、「説話的歴史」や、「国民的童話」および「個人」の「徳目」が含まれる「童話」などである。ここから、実用性のない「説話」は台湾第二期では扱われなくなったことが明瞭になる。つまり、台湾第二期において、「説話」は特に「徳目」を持たない教材から一転して、「国民的精神ノ涵養」の内容を担う役割が付与されたのである。

以上の分析をまとめると、陳が指摘する台湾第二期における「文明への同化」から「民族への同化」への重点の移行は、本研究で明らかになった「国民」の「徳目」を含む「説話的歴史」が重視されてきた点から読み取ることができる。

## (2) 新たな枠組みの必要性

陳は「民族への同化」の枠組みの内容を、「皇室」、「国家」に関する教材と捉えている。そのため、前節で考察したように、「国民」の「徳目」を含む「説話的歴史」を、「民族への同化」の枠組で捉えることができた。しかし、本研究で考察した「皇室」、「国家」の教材に関連しない「個人」の「徳目」を有する「童話」は、「民族への同化」の枠組みに当てはまらない。つまり、陳の「皇室」、「国家」の教材を用いた考察からは、「民族への同化」の定義である「日本独自の価値観や伝統」の一部分しか明らかにしていないことになる。それら以外の、「日本独自の価値観や伝統」の要素を有する教材を位置づけるには、陳が定義した「民族への同化」と区別し、新たな枠組みを用いなければならない。そして、その新たな枠組みを用いて、「民族への同化」と「文明への同化」では捉えきれなかった「説話」を考察する必要もある。

本研究で考察した、「個人」の「徳目」を有する「童話」には、いわゆる「日本独自の価値観」に関する要素などを含んでいると考えられる。そのほか、本研究では考察しきれなかった「神話」、「国民的童話」にも、同化政策において何らかの役割を果たしたと考えられる。ゆえに、これらの教材を位置づけるには、今後内容を明らかにすることによって、「民族への同化」と区別して新たな枠組みを構成して行く必要がある。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、「説話」の教材を考察するには、「民族への同化」および「文明への同化」の二分法のみではなく、新たな枠組みを追加する必要があることを提示した。その他、国定第一期、第二期と比較することによって、台湾第一期から第二期までの「説話」の推移が明らかになった。台湾第一期から台湾第二期にかけて、顕著に見られる変化は二点ある。一つは、「説話」教材が減少したことである。それは、台湾第二期における実用性重視の教育方針の影響で、実用性のない「説話」が削減されたと考えられる。二つ目は、「説話」内容の重点移動である。台湾第二期では、単に「児童の興味を喚起する」ような「説話」に代わって、「個人」の「徳目」を含む「童話」と、

「国民」の「徳目」を含む「説話的歴史」が重視されるようになったのである。以上の分析から導き出した傾向は、「国民」の「徳目」を含む「説話的歴史」が、「民族への同化」への一つの重要なアプローチであるという結果が得られた。その他、「個人」の「徳目」を有する「童話」に関しては、陳の提示した二つの「同化」以外の枠組みが必要であることを示した。

新たな枠組みを定義するには、「神話」、「国民的童話」、「修身的説話」についても、考察する必要がある。本研究で扱う台湾第一期から台湾第二期の範囲内の教材推移からだけでは、十分に結果を得ることができなかったが、今後の課題として、台湾第三期、第四期および国定第三期、第四期を引き続き考察していく。その上、今回の結果を踏まえ、これらの「説話」の全体的な内容を明らかにしつつ、新たな枠組みを構成していきたいと思う。

<稿末資料>

<表3 国定第一期, 第二期および台湾第一期, 第二期の「説話」の分類結果>

国定 第一期		社 会	個 人	国 民	そ の 他
A 類	神 話				*102 因幡のウサギ二
					*101 因幡のウサギ一
					*207 浦島子
	国民的 童 話				
	童 話	704 三つのちょーちょ	305 ツバメトスズメ		*306 蠅ト蜘蛛トニ助ケ ラレタ話
		*205 助舟	309 カシノキトタケ		*315 ふかに追はれた話
		*219 二人の旅人と熊	314 日とにじ		
		*309 親切の報	318 からすとはまぐり		
		*405 白い雀一	412 マツノハナシー		
			413 マツノハナシ二		
			514 カウモリ		
			606 ひばりと人		
			*406 白い雀二		
			*419 老人と驢馬との話		
B 類	修 身	709 かはいそうな女の子	703 なまけもの		
		803 おふみの慈善			
	歴 史	*117 瓜生岩	*110 ジョージ、スチブソン一	418 神功皇后	
		*312 秀吉の逸事	*111 ジョージ、スチブソン二	621 北白川宮	
		*407 大岡忠相	*215 源為朝	*116 草香幡姫皇后	
			*216 一谷の戦一	*112 日本武尊の 川上梟帥征伐	
			*217 一谷の戦二	*204 阿倍仲麻呂	
			*308 鳥居強右衛門	*301 楠木正行とその母	
			*410 伊能忠敬	*401 大坂の役	
			*414 蒸気機関の発明		
	内 容 教 科	713 鳥の巣		*105 感心な母一	614 銅と鉄一
		516 雷の落ちた話		*106 感心な母二	615 銅と鉄二
		*120 運動			617 草木ノカケクラベ
					712 石と豆
国定 第二期		社 会	個 人	国 民	そ の 他
A 類	神 話			501 あまのいはと	417 白ウサギ一
				901 草薙剣一	418 白ウサギ二
				902 草薙剣二	
	国民的 童 話		219 はなさかぢちい		324 ウラシマノハナシー
			① コブトリ		325 ウラシマノハナシ二
			① サルトカニ		
			① モモタロオ		
	童 話	509 かまぬすびと	207 イヌノヨクバリ		317 はしとり
		609 よいでっち	214 モチノマト		513 小千部のすがる
		807 白雀一	314 うとからす		809 ワザクラベ
		924 競馬	412 サザエノジマン		914 駱駝乗
		1111 アラビア馬	518 カウモリ		1118 画工の苦心
		1220 辻音楽	523 鹿ノ水カガミ		
			607 かしこい子ども (一)		
			607 かしこい子ども (二)		
			714 西洋紙と日本紙		

A 類	童 話			808	白雀二						
				①	カラスノチエ						
B 類	修 身	618	人のなさけ	320	ハイ今スグニ						
		1011	たしかな保証	621	古机						
	歴 史	617	上杉謙信	305	ノミノスクネ	503	神武天皇				
		1015	斉藤実盛	406	ふじのまきがり	615	豊臣秀吉二				
		1019	勇ましき少女	424	なすのよ一一一	701	楠木正行一				
		1110	熊王丸	425	なすのよ一二	702	楠木正行二				
		1113	少年鼓手	524	ひよどりごえのさか おとし一	726	広瀬中佐				
		1210	公事と私事	525	ひよどりごえのさか おとし二	815	藤原鎌足				
		1221	烈士喜剣	614	豊臣秀吉一	824	橘中佐一				
				707	塙保己一	825	橘中佐二				
				712	山内一豊の妻	923	菅原道真				
				806	松下禪尼	1012	水師營の会見				
				910	汽船・汽車の発明	1104	児島高德				
				1005	紫式部と清少納言	1125	諸葛孔明				
				1007	張良と韓信						
				1207	鳥居勝商						
				1208	日本の女子						
				1219	コロンブス						
				1223	孔子と孟子						
				①	弁慶と牛若丸						
	内 容 科 教	512	かみなり			907	水兵の母	409	キツネトノギク		
		820	胃と身体					608	ヤクワントテツピン		
								810	かち屋		
A 類	台 湾 第 一 期		社 会		個 人		国 民		そ の 他		
	神 話										
				606	猿と蟹一						
	国 民 的 童 話			607	猿と蟹二						
				503	ももたろお一						
				504	ももたろお二						
				505	ももたろお三						
	童 話	617	清吉の正直	403	ミズガメオワフル一			406	ゲジョトイヌ		
		1008	二人のあきない	404	ミズガメオワフル二			1005	寓話三題 1. 矛と盾		
		1108	寓話三題 3. 釜ぬす人	508	犬と肉			1005	寓話三題 2. 狐と鳥		
		1204	悪いめしつかい	613	蟻ときりぎりす			1005	寓話三題 3. 相もち		
				708	蠅と牛の話			1108	寓話三題 1. 大穴の坊様		
				714	まけざらい			1108	寓話三題 2. 鹿わな		
				806	馬と豚の話			1209	智慧の話三題 2. 川村瑞軒		
				812	二人の農夫			1209	智慧の話三題 3. 象の目方		
				905	蝙蝠						
				1014	往ケと来イ						
				1209	智慧の話三題1.人助け						
	B 類 修 身	614	あはれみのふかい娘	412	ウマイメシ一						
		705	犬の話	413	ウマイメシ二						

B 類	修 身	711	阿金のしんせつ	510	おろかな男				
				919	孫次郎				
	歴 史			906	チエノ種				
		1213	野中兼三	514	おののとうふ	901	仁徳天皇		
				803	多助のしんぼお	1018	ダイゴ天皇		
				818	保己一				
				907	勉強				
				917	井上でん				
				1017	天下の糸平				
	内 容 教 科			1112	浜田弥兵衛				
			616	郵便					
			717	医者					
台 湾 第二期		社 会		個 人		国 民		そ の 他	
A 類	神 話								
	国民的 童 話			520	サルトカニ (一)			620	はなさかぢぢい (一)
				521	サルトカニ			621	はなさかぢぢい (二)
	童 話	710	たとへ話 1. 二匹の山羊	305	ウサギトカメ			410	カラスノチエ
		1220	助け舟 (一)	316	バセウト竹			918	虎と赤ん坊
		1221	助け舟 (二)	406	イヌノヨクバリ				
				505	サザエノジマン				
				509	かしこい子供				
				516	次郎ト犬				
		710			たとへ話 2. 鹿の水鏡				
		710			たとへ話 3. 蟻ときりぎりす				
				708	慾ノマチガヒ				
				704	往けと来い				
			716	蝙蝠					
	B 類	修 身	403	阿仁のシンセツ	614	古机			
歴 史		818	野中兼三	909	塩原多助	713	菅原道真		
		1124	呉鳳	913	井上でん	720	仁徳天皇		
						802	能久親王		
						1002	楠公父子 (一)		
						1003	楠公父子 (二)		
						1023	乃木將軍		
						1103	日本武尊		
内 容 教 科				412	イモホリ	1014	水兵の母		
				605	水ト火 (一)				
			606	水ト火 (二)					
			612	芭蕉トミカン					

注

- (1) 周琬窈, 許佩賢, 蔡錦堂 (2003) の『日治時期台灣公學校與國民學校國語讀本 解説. 總目次. 索引』における時期区分の方法に基づく。
- (2) 陳培豐 (2001) 『同化の同床異夢』 p. 24, 三元社。
- (3) 同上, p. 24
- (4) 陳は, 蔡錦堂 (1993) 「日本挾台初期公学校『国語』教科書之分析」における分析に基づいて考察を行った。
- (5) 陳が用いたのは, 「天長節」, 「紀元節」, 「皇宮」, 「台湾神社」, 「仁徳天皇」, 「醍醐天皇」, 「明治天皇」, 「日本の地図」, 「我が国」, 「国旗」, 「わが国の歴史」, 「黄海之戦」の15教材である。
- (6) 台湾教育学会 (1939) 『台湾教育沿革誌』 p. 231
- (7) 甲斐雄一郎 (2007) 「読書科用教科書からみた『台湾教科用書国民読本』の教材選択」『国語科教育研究』全国大学国語教育学会 第112回宇都宮大会研究発表要旨集。
- (8) 文部省 (1904) 『尋常小学校読本編纂趣意書』『近代日本教科書教授法資料集成』第11巻, 東京書籍。
- (9) 周琬窈, 許佩賢, 蔡錦堂前掲, p. 46
- (10) 教育史編纂会 (1938) 『明治以降教育制度発達史』第四巻, p. 61
- (11) 文部省前掲
- (12) 同上
- (13) 仲新[ほか]編 (1982) 『近代日本教科書教授法資料集成』第11巻編纂趣意書 1, 東京書籍。
- (14) 修身科の編纂趣意書の「国民」に関する「徳目」は, 陳が扱う天皇, 皇族に関する内容以外に, 忠君, 忠義, 勇気などを含む。その他, 兵役, 納税, 教育などの項目は, 甲斐の分類の「公民」の部分に相当する。
- (15) 秋田喜三郎 (1943) 『初等教育国語教科書発達史』 p. 304, 但し刊行は1977年, 文化評論出版。
- (16) 仲新[ほか]編前掲, p. 259
- (17) 題名のない第一巻, 第二巻の説話教材も分析対象にしている。
- (18) 陳前掲, pp. 39-45
- (19) 同上, pp. 73-78
- (20) 同上, pp. 142-159
- (21) 同上, p. 88
- (22) 同上, pp. 158-159
- (23) 同上, p. 94
- (24) 同上, p. 159
- (25) 同上, p. 88
- (26) 台湾教育学会前掲, pp. 319-322